



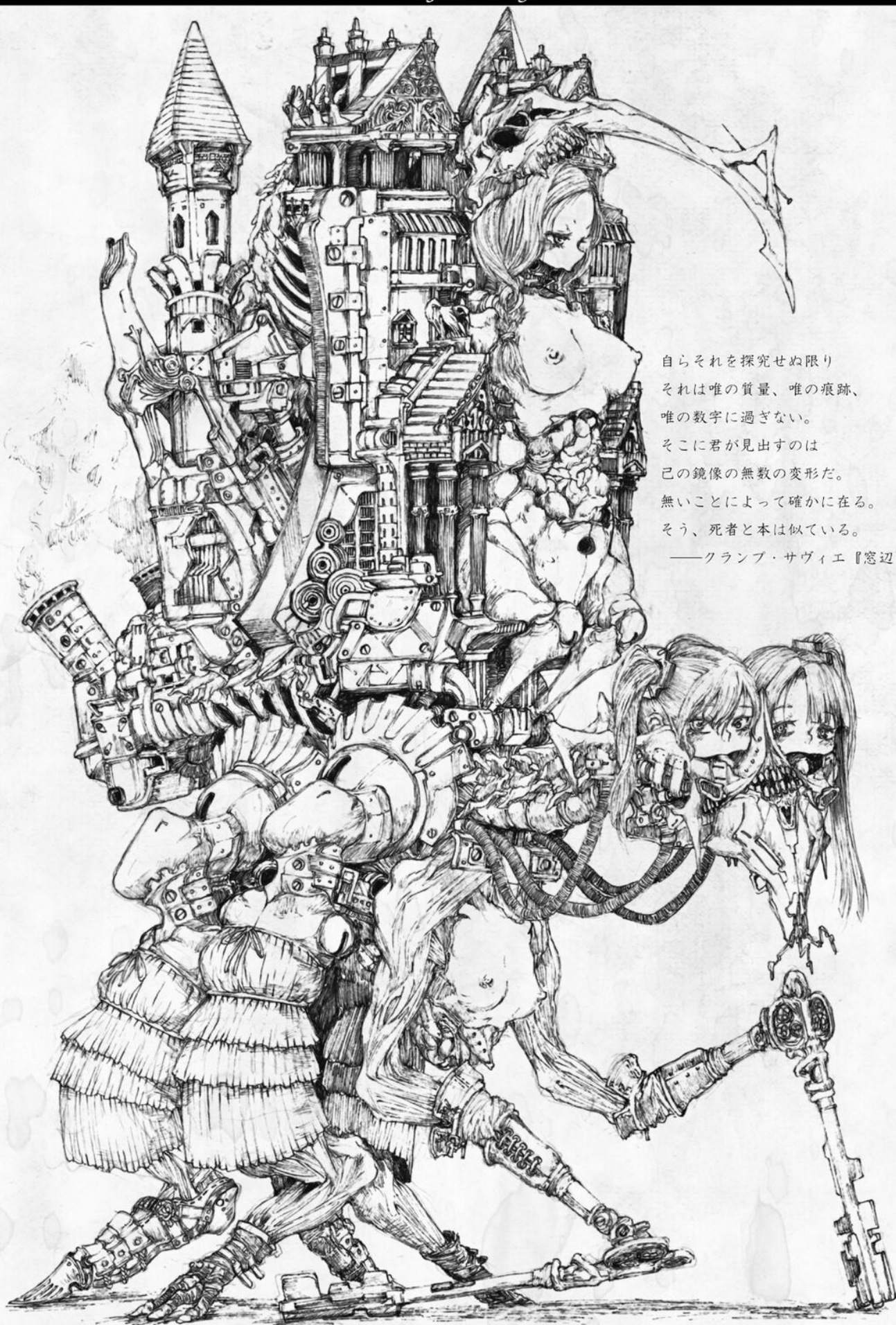
BLACK DAHLIA IMMORTAL

ブラック。ダリア。イモータル

朽techS 2015

Mature Content

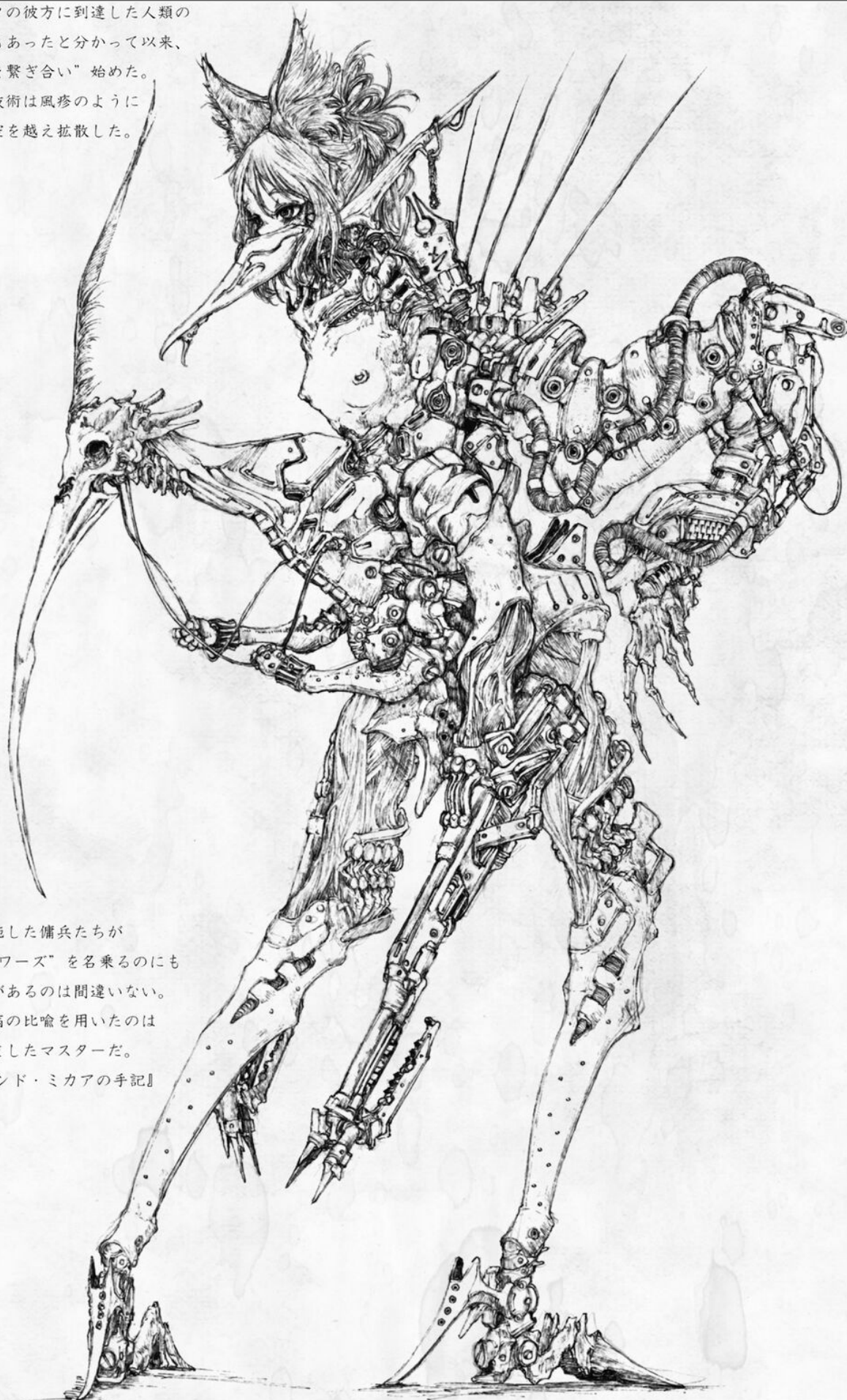
◆ 献身の鍵持ち / Key-bearer Of Devotion ◆



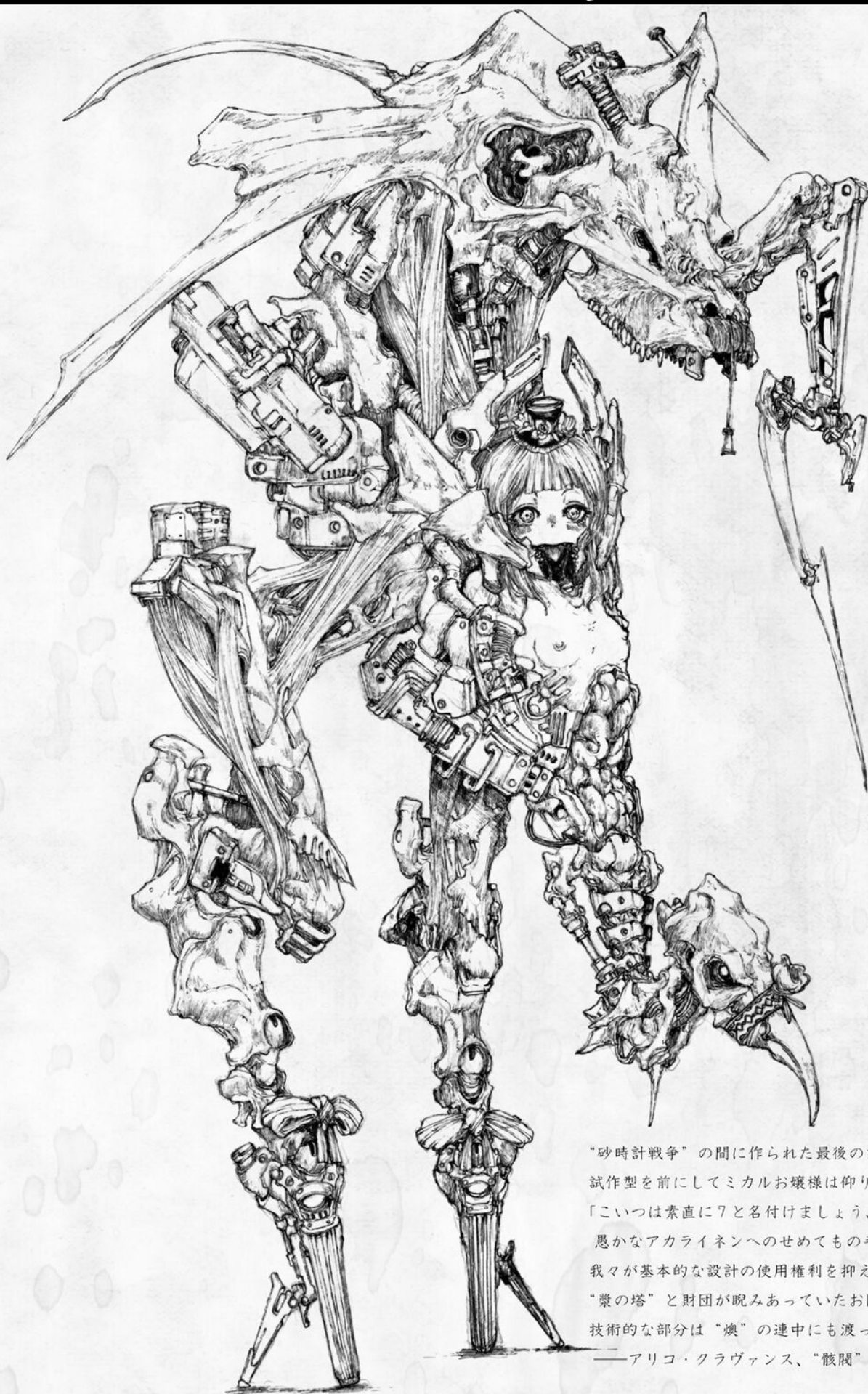
自らそれを探究せぬ限り
それは唯の質量、唯の痕跡、
唯の数字に過ぎない。
そこに君が見出すのは
己の鏡像の無数の変形だ。
無いことによって確かに在る。
そう、死者と本は似ている。
——クランプ・サヴィエ『窓辺の書』

◆ クスの幽鳥 / Kutthin Ghost Bird ◆

混沌禍の前に星々の彼方に到達した人類の
グループが幾つもあったと分かって以来、
私達は“再び手を繋ぎ合い”始めた。
それと共に屍者技術は風疹のように
またたく間に真空を越え拡散した。

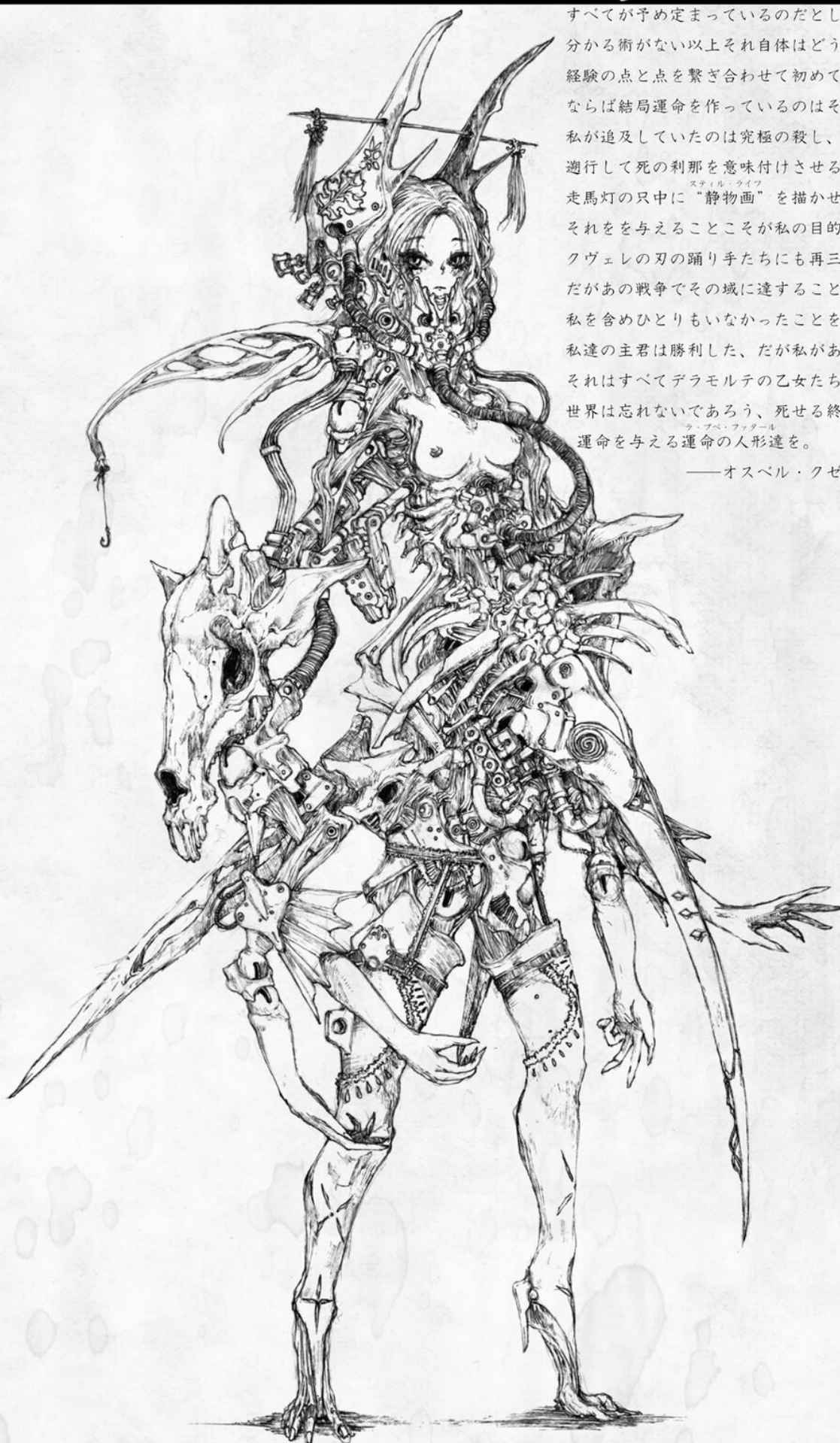


あの屍肢改造を施した傭兵たちが
“ブレイグ・フラワーズ”を名乗るのにも
そういった含みがあるのは間違いない。
そしてかつて疫病の比喻を用いたのは
あの行方をくらましたマスターだ。
——『ファーランド・ミカアの手記』



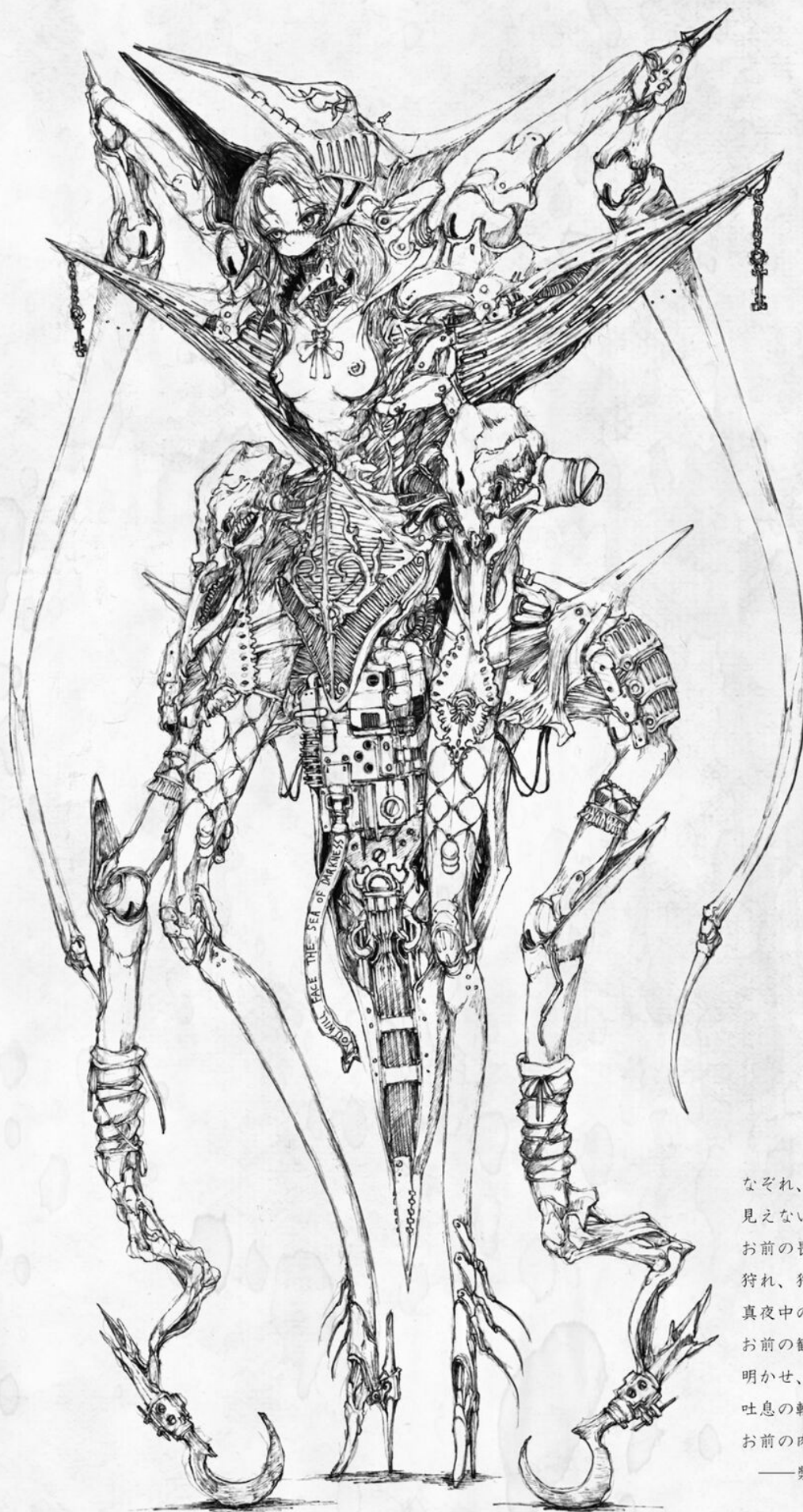
“砂時計戦争”の間に作られた最後の型は6でしたから、
試作型を前にしてミカルお嬢様は仰りました。
「こいつは素直に7と名付けましょう、
愚かなアカライネンへのせめてもの手向けよ」
我々が基本的な設計の使用権利を抑えられたのは
“紫の塔”と財団が睨みあってたお陰でした、もっとも
技術的な部分は“燐”の連中にも渡ってしまいましたかね。
——アリコ・クラヴァンス、“骸閥”初代告解師

◆ デラモルテのプリマ / Prima Of Dellamorte ◆



すべてが予め定まっているのだとしても、
分かる術がない以上それ自体はどうでも良いことだ。
経験の点と点を繋ぎ合わせて初めて運命の輪郭を知る、
ならば結局運命を作っているのはその人自身ではないかね。
私が追及していたのは究極の殺し、どんな人生にも
遡行して死の刹那を意味付けさせるようなひと刺しだった。
^{スティル・ライフ}
走馬灯の只中に“静物画”を描かせる靈感、究極の体験。
それを与えることこそが私の目的だと、
クヴェレの刃の踊り手たちにも再三伝えてきたつもりだ。
だがあの戦争でその域に達することができた生者は
私を含めひとりもいなかったことを認めねばなるまい。
私達の主君は勝利した、だが私があの日々に見た輝き、
それはすべてデラモルテの乙女たちによるものだった。
^{ラブ・ベ・フットール}
世界は忘れないであろう、死せる終楽章の担い手、
運命を与える運命の人形達を。

——オスベル・クゼクロエ、黒耀月の暗殺者



なぞれ、なぞれ
見えない道
お前の畏れの影を
狩れ、狩れ
真夜中の聲
お前の歓喜の贅を
明かせ、明かせ
吐息の軌跡
お前の肉体の勝利を
—— 漿の騎士の詩



深紅の春霞、赤の洪水。
その向こうで燃えている
革命という名の薪。
何もかも、草木でさえも
血色を取り戻す季節の只中、
ただ私の戦いに巻き込んだ人々を
静かに思い出すことしか出来ない。

——カッシウス・デラモルテ、
最後のマスター・ネクロテック

◆ 毒針姫 / Stinging Her Highness ◆



ノイエ・パンクス、火星の長城、
ケレスの血浴郷、バース連邦……
太陽系内じゃあアキタ・ヌヴに
いるとき以外、我々は常に命を
狙われていると言っても良い。

——カスパー・“K9” スロヴォ、
駆体ライブラリー派の“守衛”

◆ 死せざる獅子蟻 / Immortal Myrmecoleo ◆

クランジュ III、ニューダンフォート。

あの市街戦のことを思い出したい者はいません、
とりわけ、現地にいた私はね（肘から光のない右腕を示す）。
確かにモルデギア計画はうまく行っていませんでしたが、
それに代わる“連続暴動式爆弾”は今にして思えば
明白に許容できない不確実性を持っていました。

壁に穴を開ける前にゾス人が間に合ったから、
私も今ここであなたとお話できているわけです。
あれ以来機テックスは先進的な研究を躊躇するようになり、
クラリモンド博士が再び指揮を執るようになりました。
そのことは仕方ありません……博士だってもう昔のように
共和国のマスターであった過去との戦いに囚われては
いませんしね。ただ、私が心配しているのは、
一部の研究員達の動向です。当人たち以外の誰も
把握していないようなプロジェクトがあるという噂が
あります。要望はなるべく拾って、シュルツへの
異動の心配も可能な限り行っていますが……
ええ、“機”の立ち上げ当初から私はいますが、
組織の性質自体が変わりつつあるんですよ。

——ノエイン・ハールマン、機テックス次席研究員

テックキーパーの実働部隊の戦力はよく分かっていませんが、
バーズ連邦の“赤手袋”から引きぬいた異能力者達が
光になっているというのはいささかしこいです。
カネゴリアレベル以上の過力種使いしか使えない
超重装甲を着た構成員が確認されています。そんな人間が
今さら新たに出現するとは思えない。
これは私の独自資料ですが、マスター・ガンドリュイの
暗殺現場に現れたという“S字ナイフの男”は
「ナンセンス・アリス・クラブのヒシエキ（被使役??）」
を名乗ったといいます。

ええ、“塔”事務局への質問は一切無視されています。

——コルヴェー・アバンシル、デラモルデ研究家

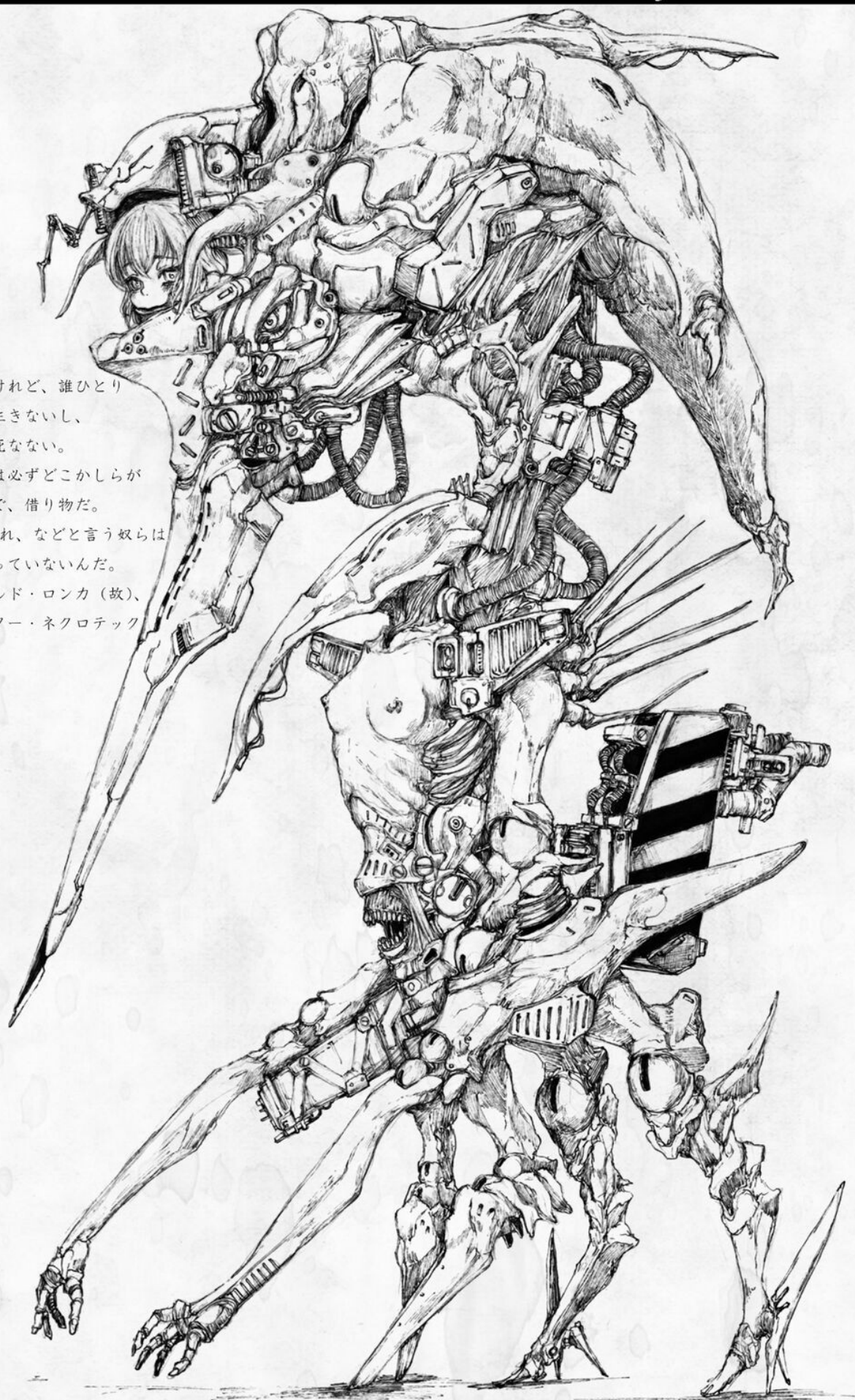
“灰薔薇の結柱”が我々の中でも大きな勢力なのは間違いない。

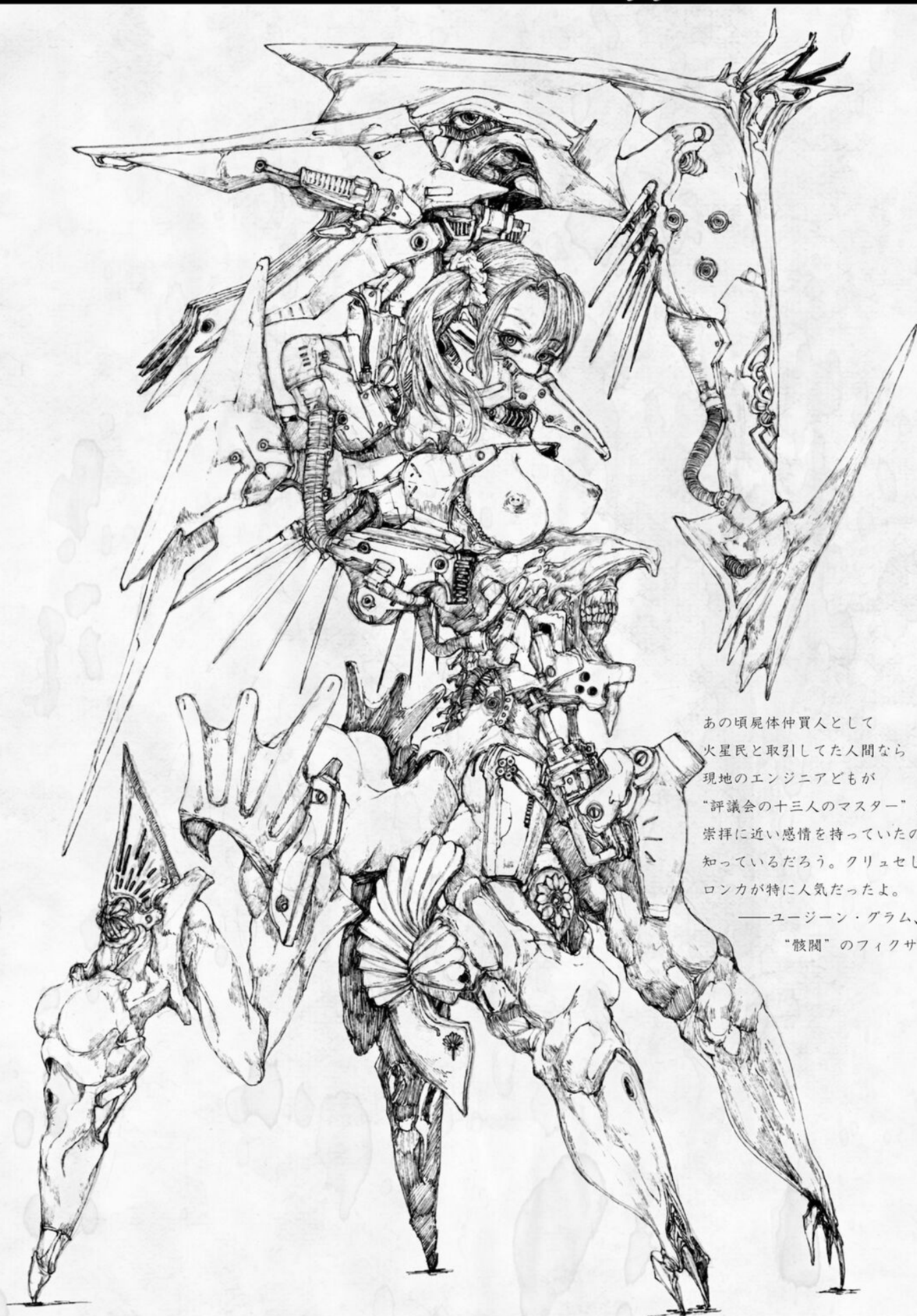
血浴族ほど荒々しくなく、クヴェレの刺蝸たちのように格式ばってもいない、
御しやすい奴だと思われているのでしょう。けれども我が血族からすれば
彼らは自らの品位を捕食者からダニのような寄生動物へと貶めているのです……
あなた方が家畜に過ぎないなどと申すつもりはございませんのよ、誤解なきよう。

——プレーネ・カーステン、ネクロボリスの“家内人”、仮擬吸血鬼



誓って言うけれど、誰ひとり
一から十を生きないし、
一から十を死なない。
我々の人生は必ずどこかしらが
間に合わせで、借り物だ。
“本物”であれ、などと言う奴らは
それを分かっていないんだ。
——ベルナルド・ロンカ（故）、
マスター・ネクロテック





あの頃屍体仲買人として
火星民と取引してた人間なら
現地のエンジニアどもが
“評議会の十三人のマスター”に
崇拝に近い感情を持っていたのを
知っているだろう。クリュセじゃ
ロンカが特に人気だったよ。

——ユージーン・グラム、
“骸閥”のフィクサー

◆ 大沼の女王 / Queen Of Grand Marsh ◆

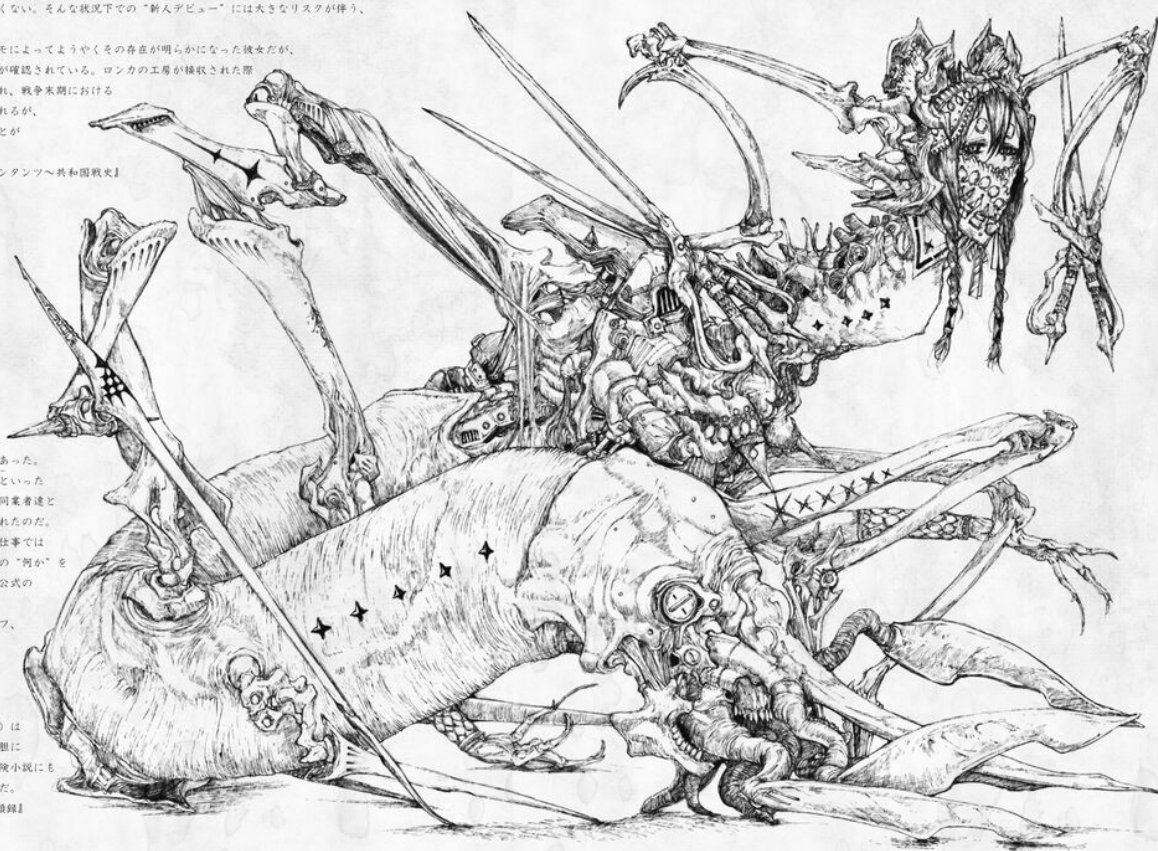
喰屍鬼の水中部隊に手を焼く戦線を支えたのは、間違いないロンカの門下生であるエリベラ・グロウだった。戦後すぐの時期には名前さえ不明で“エンジニアB”と称された彼女は、水中戦をこなせるネクロチックの開発に手腕を振るったが、ロンカは彼女を数えて鑑賞し、その作品をあくまで工房全体での設計であるとした。“黒い議事堂事件”直前において3羽、バルビエ、トッドリーナスが陰謀をめぐらせる一方、スターランとアカライネンが密談を重ねているとの噂が広まり始めていた時期、ロンカが何とか各方面を繋ぎ留めようと水面下で努力を続けていたのは想像に難くない。そんな状況下での“新人デビュー”には大きなリスクが伴う、そう判断したのだろう。

死せざる麒麟についてのロンカ自身のメモによってようやくその存在が明らかになった彼女だが、残念ながら“黒い議事堂事件”での死が確認されている。ロンカの工房が接收された際、数々の設計図がスターランの下に届けられ、戦争末期における傑作機の幾つかがそこから連れられたとされるが、それらは彼女とロンカの共作であったことが現在では分かっている。

——ミランダ・ベリシャ『トーテンタンツ〜共和国戦史』

龍の屍体を使うことには確かに意味があった。だからこそ、龍の墓場の王や豪傑学園といった良好な関係を結んでいるとは言えない同業者達と難しい交渉を取りまとめる努力がなされたのだ。得難い素材の収集自体はエンジニアの仕事ではなかった、だが仕様書に書かれた以上の“何か”を求め私費を投じて公式の、あるいは非公式の任務を命じたマスターは少なくない。ケレスの悪鬼魂、金沙森のツリーエルフ、南方のラングビースト……あるいはゾス人の標本や、もっと沢山の分からない何かの体組織。宝石を求めるかの如き情熱で以て、屍体買い付け人（或いは単に屍体泥棒）は世界中を駆け回った。探査が浪費と落胆に終わることも多かったが、例外なく冒険小説にも負けないような結果を帰っていたものだ。

——イシュバーン・ルカーチ『回顧録』



◆ 黒回廊の騎士 / Chevalier Of The Black Corridor ◆

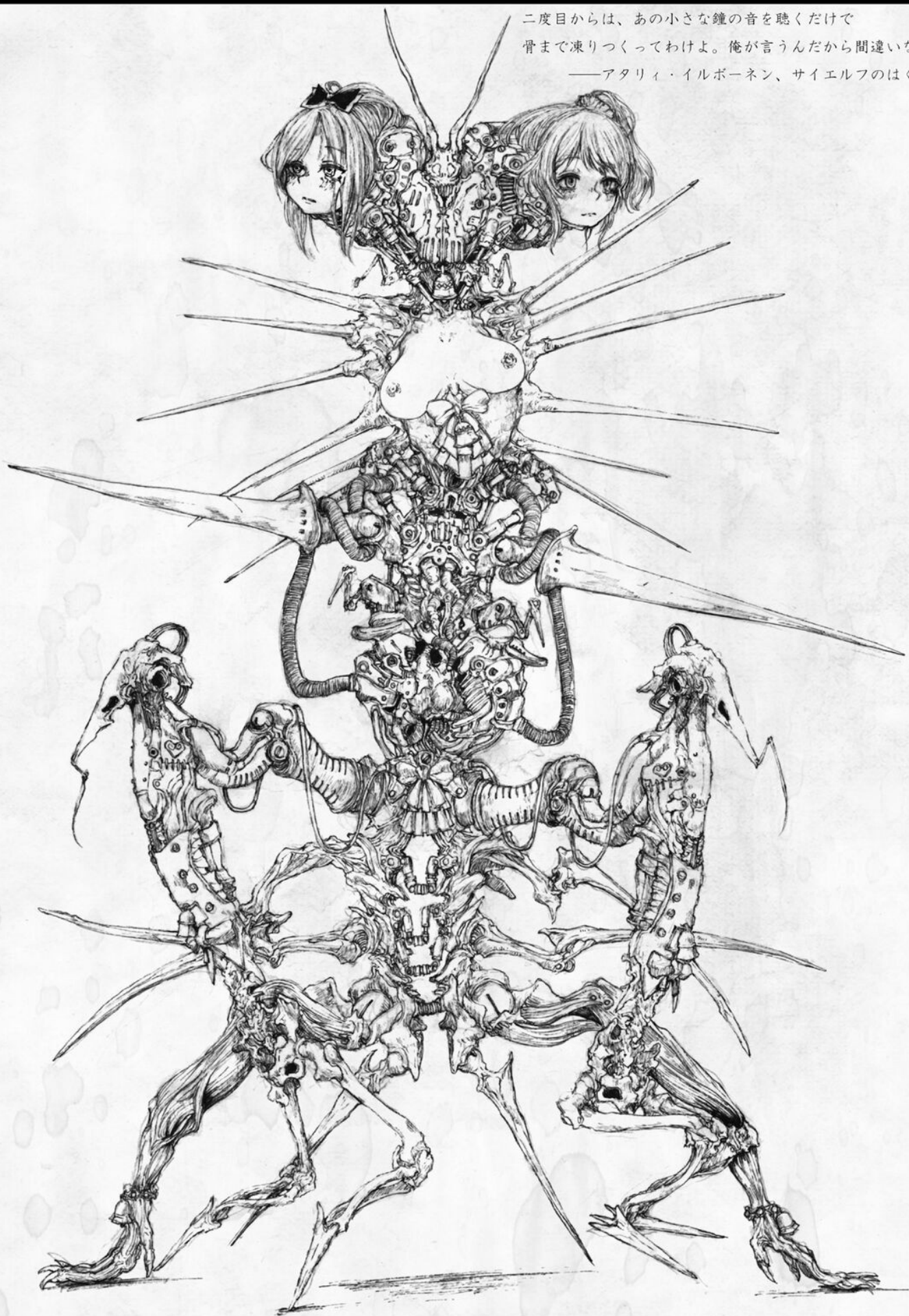
僕も老いたのだろう、最近よく新カジエラの
夕陽を背にした沢山の尖塔を懐かしく思い出す。
あの頃……刺客を差し向け合う仲となってさえ、
デラモルテこそが最大の理解者だった。
今となってはもう確信を持ってないがね。

——クラリモンド・バーナバス、煥テックス主任



◆ 拷問者のアニマ / Torturer's Anima ◆

二度目からは、あの小さな鐘の音を聴くだけで
骨まで凍りつくってわけよ。俺が言うんだから間違いない。
——アタリィ・イルボーネン、サイエルフのはぐれ者



◆ 埋葬夢の奇術師 / Buried Dream Conjurer ◆

主任、産まれてきたこと自体が、勝ち目のないゲームへの挑戦だろう？

——アンナ・パンクス・ブルーノート、煥テックス主席研究員





生命は罪を担い
魂は悪を媒介する
それでも痛みは汝だけのもの
汝がいかに屍者に近かろうとも
ゆめゆめ忘れる勿れ
——ブレイグ・フラワーズの標語

◆ 災厄の頤器 / Mentum Vessel Of Calamity ◆

ネクロテック、忌々しい名前！

あれが議題に上る時ときたらいつもの

何もかもとっちらかったあとか、

最早とっちらかることが避けられない、

そんな事態ばかりだ。どんなに我々が

“衆の塔”とテックキーパーに働きかけ、

ガイスト・アカデミー

蒼雲学園生え抜きの屍術師をあちこちに

ネクロマンサー

送り込もうとも、エンジニアどもは次から次へと

現れる。地球の外のこと大目に見てやっても

良いがな、今ではLMFさえ部門を持っているし

“クロンダイク骸閥”クロンダイク・コープス・コンパインなんてものまである。

最早屍者は魔術的な戦いから疎外されていると

言っても良い……あんなものがあるから

いつまで経っても傭兵として生計を立てる同胞が

存在し続けることになるのだ。“砂時計戦争”は

確かに共和国を減ぼしたが、その目的は完全に

失敗したと言って良い。これは建前などでは

ないのだが、邪悪さ、不浄さを取り除いた

リヴィング・デッドなどあってはならんのだよ。

分かるかね？

——ヤネク・フォン・ヒルシェ、

“見えざる理事会”の喰屍鬼貴族



◆ クレブシドラの枢機卿 / The Hourglass Cardinal ◆

僕はネクロテックとは、魂を信じない人間たちの玩具だと思う。

生を成り立たせる靈魂って意味じゃないよ、此处ではない
どこかにおいて裁かれたり、救われたりするもののことさ。

——ルチオ・ディカネッレ、
“飛び地”の屍揮官



■□■
※与太話です

デッド・ウェルディング

この形式のイラスト群を“ネクロテック”、「少女の屍体を溶接する」と表現するようになってから大分経つのだが、さて溶接という言葉が頭の中でぐるぐる回していたらふっと思い出したのが、「はんだごてを美少女フィギュアの股間に突っ込んでぐちゃぐちゃに破壊した画像をアップロードしているひと」のことだった。

違う、溶接は新たな形を造りだすんだ、クリエイティブな行為だ、と私がどんなに言い張ったところで、肉体を切って接いでいる以上は破壊衝動を内包していることを否定できない。私と彼のしていることの間にどの程度の違いがあるのかということに幾ら言葉を尽くしたところで何となく虚しいというか、薄い嘘を塗り重ねていくだけに思える（随分と傲慢な見解とも取れ、先方こそ一緒にするなとお怒りかも知れない）。

でも同じなのかなと言ったら、やっぱり違うよなあ……みたいな煮え切らない状態に陥ったので、逆になにがどう同じなのかなというところを考えると、少女という形象に破壊的なやり方を伴ってなにかを外挿するということだ。

思うに、ネクロテックに関しては彼女たちに“突っ込まれるもの”が主従を転置するほどに巨大であり、ただペニスの代わりであるということにはあまりに多くの細部を伴うがために、結果的に「機械に少女の肉体が貼り付けられている」というかたちになるのだろう。

そして、同じ部分を確認したことで、差異が見えてくる。つまり彼の、熱と金属によって荒々しく凌辱された人形たちは「事後」の状態にある一方、拙作であるネクロテックは「今まさに貫かれている」ということだ。

H・R・ギーガーの交合一体化した有機機械のように、ひとつのセックスの最中として一個体を形成している状態にあって、しかし静的な佇まいであるということ。そこに彼女たちが屍者である意味があるのかも知れない。生の瞬間瞬間を切り取れば、そこにあるのは「今はもう生きていない私」という時空間の死体であり、どんなに烈しい行為の最中にあっても我々は残像のように“もう存在しないもの”を冷たく遺し続けるのである。されど生きる限り溶接の営みは終わらない、それではまたの機会にお会いしましょう。

——メグリム・ハルヨ



奥付

『ブラック・ダリア・イモータル』

2015/05/05 COMITIA112 にて発行

著者：メグリム・ハルヨ（朽tech8）

連絡先：haruyoi@hotmail.co.jp

pixivID: 133923

TwitterID: megrim_haruyo

印刷所：ねこのしっぽ（有）様

